

## 審査の結果の要旨

氏名 田中 智輝

本論文は、ハンナ・アレントにおける近代教育批判の射程を、時間性と暴力性という二つの視点からとらえようとしたものである。

序章では、ハンナ・アレントの思想的変遷の概略を示したうえで、彼女の教育論の骨子を確認し、政治思想において教育論がどのように位置づけられているのかが示された。

それをうけて第1章では、「出生」概念をめぐるアレントの思索の変容を辿ることによって、アレントの教育への思考が醸成される過程を跡づけることが試みられた。こうした試みを通じて、従来対立的にとらえられていた政治論と教育論が、「出生」概念の生成においてその出自を共にしていることが確かめられた。

第2章では、アレントの近代教育批判を端緒としつつ、彼女が世代をこえた世界の継承と更新に向けた「過去への態度」をどのようにとらえているのかについて、彼女の時間論に即して検討された。そして、過去の出来事の多様な語り直しは、語られることなくしては忘却に晒されている出来事を救済するという点で、世界の継承と関わると同時に、そうして救い出された出来事が語られることによって世界に新しいものがもたらされるという点で世界の更新に関わっていることが示された。

第3章では、教育における権威の喪失と暴力の台頭という状況をふまえたアレントの思索を検討することによって、思考の領域としての教育のトポスにおいて要請される教育者の役割が明らかにされた。そこで再措定される教育者の権威は、超越的な絶対者に依拠するものではなく、複数の人びとがそれぞれに新しい「始まり」であるという事実に根ざし、その「始まり」を保護し増大させるという働きかけを通じて行為遂行的にその正統性を得るものとしてとらえ直された。

第4章では、世界疎外論の延長線上において、アレントが観照的生活においても世界からの疎遠さを問題化しているということに着目し、それによって私たちの世界把握のあり方がいかに規定されているのかについて考察がなされた。検討を通じて、アレントが思考とリアリティの分離を乗り越える試みに際して、理解の概念に独自の意味と可能性を見出していたことが明らかにされた。

第5章では、そうした理解の試みが教育においてどのように取り組まれているのかが検討された。検討にあたっては、お茶の水女子大学附属小学校の「市民」の授業における論争問題学習の実践を考察の対象とし、政治的な事柄を理解する過程において看取される政治的主体化の契機が示された。さらに、本章では、こうした政治的主体化も含めた、多様な政治的主体の現われについて、アレント、ムフ、ランシエールの政治的主体論を手がかりに考察が深められ、ムフやランシエールの批判的視座を踏まえた上で、本論文で検討してきたアレントの教育論へと立ち返ることによって、政治的共同体への同一化を要請するものであるかのように見える彼女の教育論に、それを相対化する契機が内含されていることが明らかにされた。

以上の検討をとおして、アレントの近代教育への批判は、世界疎外の過程を逆戻りし古代ギリシャのポリスを再興するという復古主義に与するのではなく、他者ととともに人間に固有の自由な空間としての世界を創設するための新たな手法として政治と教育を位置づけようとしたものであることが明らかにされた。その意味で、本論文は、従来の保守的なアレント理解を刷新する意義を有するものであり、この点に本論文の学術的意義が見いだされ、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと判断された。